

を評価した。【方法】外科的切除され病理組織学的診断の確定した24例のPAと11例のdiffuse astrocytoma (DA) のホルマリン固定パラフィン包埋切片において、GFAP、Olig 2、Iba 1の特異抗体を用いた酵素抗体法を行った。Olig 2とIba 1では陽性細胞の標識率を測定し、2群間で比較検討した。またPAで、GFAP、Iba 1、Olig 2とMIB-1の二重染色法ないし同一切片再染色法を行い、MIB-1陽性細胞を同定した。【結果】Olig 2標識率は、PAで46.8%±15.4%、DAで13.8%±7.8%で、PAで有意に高値であった(P<0.001)。PAでは、Olig 2陽性細胞は充実性領域に比し海綿状領域に多く分布しており、oligodendroglioma様領域ではさらに多くの陽性細胞が見られ、標識率は90%以上であった。Iba 1標識率は、PAで19.9%±6.5%、DAで20.9%±9.9%で、両群間に有意差はなかった。またPAでは、MIB-1陽性細胞の多くがOlig 2やIba 1に陽性で、GFAP-MIB-1陽性細胞は少数であった。【考察】Olig 2やIba 1陽性細胞の解釈には注意を要するが、PAの構成細胞はGFAP陽性細胞のみならず、oligodendrogliaやmicrogliaの免疫表現型を有する細胞など多彩であると言える。増殖能を有する細胞がOlig 2やIba 1陽性を示す点は、PAの腫瘍起源や腫瘍増大の機序を考える上で重要である。

11. 隆起性皮膚線維肉腫におけるCOL1A1-PDGFB融合遺伝子の発現

岡田 悦子, 安田 正人, 石川 治
(群馬大院・医・皮膚病態学)

隆起性皮膚線維肉腫 (DFSP) は、皮膚間葉系悪性腫瘍である。遠隔転移はまれであるものの、临床上、境界明瞭に見える部分よりも広範囲に腫瘍細胞が浸潤しているため広汎に切除する必要があり、切除が不十分な場合にはしばしば局所再発をきたす。これまで、DFSPの診断には免疫組織学的に第XIIIa因子陰性、抗CD34抗体陽性であることが用いられてきたが、診断の根拠として完全ではなかった。近年、DFSPの染色体異常について、17q22上のI型コラーゲン $\alpha 1$ 遺伝子(COL1A1)と22q13上の血小板由来増殖因子B遺伝子(PDGFB)からなるCOL1A1-PDGFB融合遺伝子が形成されていることが明らかとなり、その染色体異常を検索することにより、遺伝子レベルでの診断が可能になった。

今回当科で切除手術を行ったDFSP患者3例の腫瘍細胞株でのCOL1A1-PDGFB融合遺伝子形成を確認したため報告する。

12. セレン強化ブロッコリースプラウトのヒト前立腺がん細胞への影響

Rizky Abdulah, 勝矢 陽子, 小林 健司
Eka W Suradji, 大谷 哲也, 小山 洋
(群馬大院・医・生態情報学)
伊藤 一人, 鈴木 和浩
(同・医・泌尿器病態学)
Ahmad Faried, 桑野 博行
(同・医・病態総合外科学)
村上 正巳 (同・医・病態検査医学)

【目的】必須微量元素セレンは、ブロッコリースプラウト中の天然抗がん活性化合物であるスルフォラファンと同様に、抗がん作用を持つ化合物を構成する成分として期待を集めている。本研究は日常的に摂取できるがん予防食品を開発することを目的として、セレン強化ブロッコリースプラウトのがん細胞増殖抑制効果について、ヒト前立腺がん細胞株を用いて検討した。【方法】セレン強化ブロッコリースプラウトの栽培は、亜セレン酸ナトリウム水溶液中で発芽させた後、適宜、同水溶液を添加して行われた。対照群としての通常栽培は、超純水のみで行われた。スプラウト中のセレン化合物の分析は、分子サイズ排除カラムを接続したHPLC-ICP-MSを使用した。スルフォラファン分析は逆相系カラムを用いて行った。スプラウト抽出物のがん細胞増殖抑制活性は、ヒト前立腺がん細胞(LNCap, PC-3, DU-145)を用いたMTTアッセイで検証した。【結果】セレン強化栽培スプラウト中の主なセレン化合物は、セレノメチルセレンシステインであった。スプラウト抽出物のがん細胞増殖抑制活性は、セレン強化栽培抽出物のほうが通常栽培抽出物よりも高かった。【考察】セレン強化栽培スプラウト抽出物のほうが、がん細胞増殖抑制活性が高いのは、スルフォラファンの抗がん作用がセレン化合物によって増強されたためと考えられる。

13. BCR/ABL陰性慢性骨髄増殖性疾患における顆粒球、血小板のJAK2遺伝子変異の検討

外山耕太郎, 入沢 寛之, 横濱 章彦
内海 英貴, 斉藤 貴之, 半田 寛
松島 孝文, 塚本 憲史, 唐沢 正光
村上 博和, 野島 美久
(群馬大院・医・生体統御内科学)

【目的】BCR/ABL陰性慢性骨髄増殖性疾患(CMPD)は造血幹細胞異常による疾患である。近年発見されたJAK2遺伝子V617F変異はCMPDの診断、病態解明に寄与すると期待されるが、既報の多くは顆粒球を解析対象としている。そこで顆粒球と血小板に分けJAK2遺伝子変異の有無を検索し、臨床像との関連を検